芳香

十五年通ったカフェがもうすぐ閉店するとの報せを受けて、足を伸ばした。その日は雨だったので、あのおいしいお茶でも飲んでリラックスし、持病の気象病に対抗しようとの考えもあった。

店内は雨だからかいつもより閑散としている。カウンター席に座った私は、「いつもの」と、裏メニューのルイボスティーを頼んだ。

「お足下の悪いなか、ありがとうございます」

いきなり閉店とは何があったのか聞きたかったが、不躾なような気がして口に出ない。

店主さんが持ってきたのは、いつもの華やかなカップではなく、外側が黒く内側が白い、シックな焼物だった。カップの温度調節のため、店主さんがそこにお湯を注ぐ。湯気を見ていると、雨で冷えた私の肌までじんわり温めてくれるような気がする。

「今日のカップは渋いといいますか、侘び寂びを感じるようですね」

「たまにはこんなのもいいかなと。今日は雨ですしね」

そのように言われると、外からか焼物からか、土の匂いがするような気がした。なんだっけこの匂い、そうだ、ペトリコールというんだ。

「雨の匂いって、わかる人とわからない人といるんですよね」

私がぽつりとそう言うと、店主さんはいつもよりやや低めの声で答えた。

「そうなんですか。私は子どもの頃からよくわかって、雨の匂いがすると走って帰ったものですけど。逃げるように」

なんだか今日の店主さんの笑顔は疲れているようにみえた。目の下から頬が青白く、やつれてるというか、体調が悪そうだ。

「店主さんは雨がお嫌いですか」

「嫌いというか、しんどくなりますね」

その時、別の席でお客さんが誤ってカップを転かしてしまった。幸いカップは割れなかったが、紅茶が溢れてしまう。店主さんはさっと布巾を持っていき、「すぐに新しいのをご用意しますね」と机を拭いた。

戻ってきてサービスの紅茶を淹れ直す用意もしつつ、私のお茶も手際よく淹れ続ける店主さんに、私はこう声をかけた。

「雨の日でも、こちらに伺うと私は楽になりますよ」

そう仰っていただけて光栄です、という店主さんの声が、とぽぽぽぽ、とお湯を注ぐ音に溶ける。ティーサーバーでお茶の色がゆらりとお湯に滲んでいく。窓についた雨水で歪む外の景色と同じように。ペトリコールとルイボスティーの香りが混ざって、しっとりとした時間がゆっくり流れる。

これでいいのだ、と私は思う。店主さんの嬉しいことも苦しいことも、全部この香りに含まれている。ここまで続けた理由も閉店の訳も、全てを教えてくれている。

最終日、私はまたお店に伺い、いつものカウンター席に座った。暖かな陽気の気持ちいい日だった。

前回より血色のよくなった顔で、店主さんがルイボスティーを運んでくる。今日のカップは四葉のクローバーだ。

「何かいいことありましたか」

そう尋ねると、店主さんは顔を赤らめて、わかりますか、と小声で言った。

「ここだけの話ですが、私も子どもを授かりまして」

すとん、と腑に落ちた。香りに満ちたこの店は、時には酔ってしまうことも、時には癒されることもある。

「それはおめでたいですね」

こんな店主さんも優しさに包まれ、無事に幸せが訪れますように。昔、妊娠中だった私に、店主さんがノンカフェインの裏メニューを出し続けてくれたように。

「ありがとうございます」

そう言って薄紅色にほころぶ店主さんの笑顔が、何よりもこの店の味を作り続けてきたことを、常連たちはみんな知っている。